

# 活彩!保健大学だより

AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

第15号/平成18年12月26日発行 青森県立保健大学広報誌



大学祭



韓国仁済大学への派遣



海外授業(イギリス)



現代GP

## CONTENTS

現代GP	2	特別講義	16・17
大学祭	4	平成18年度研究センター活動	17・18
サークル活動	6	ケアマネジメントフォーラム in 青森	19
高大連携	8	平成18年度教育センター活動/研修科	20
韓国仁済大学への派遣	10	平成18年度教育センター活動/国際科	21
海外授業(イギリス)	11	公開講座	21
就職関係	12	保護者懇談会/図書館利用状況	22
卒業生から	13	出張講義及び大学見学状況/入試案内	23
実習関係(感謝の言葉)	14	教員の異動/大学院前期課程入試案内	24
大学院関係・修士論文中間発表会	15		

## 現代GP(下北地域を元気にする学生参画型教育)

—平成18年度の活動状況—

副学長 上泉 和子

平成17年に本学は文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)に採用されました。GPとはGood Practiceの略で、本学が行っている地域貢献と学生参画型実践教育が巧みにリンクされたすぐれた教育プロジェクトとして認められました。本学の教育の一部を下北地域で展開することで、学生の現地での学習活動を保健医療福祉の包括的ケアの向上に繋げようというものです。このためには、学生の力だけではなく、教員が研究活動や研修事業を現地で展開し、地域貢献という側面から支援しています。そこでこの活動プログラムのテーマを「下北地域を元気にする学生参画型教育」として、活動してきました。18年度からは本格的に下北地域での活動を展開してきましたので、その状況をご紹介します。

現代GPは、「教育部会」「地域貢献部会」「広報部会」「現地対策部会」の4つの部会に分かれて活動をしてきましたので、部会毎の活動をご紹介します。

### 1. 教育部会

教育部会は現代GPの主軸になる部会で、学生参画型教育を計画実施運営している部会です。今年度下北地域で実施された教育科目は、下の表に示しました。

保健福祉概論は1年生の授業で、この4月に入学した学生がはじめて3学科合同のフィールドワークを風間浦村で行いました。この科目は保健医療福祉の連携を目指して、健康の概念、生活者主体の保健医療福祉の基本理念や考え方、多職種との連携の必要性、地区把握調査の基本的方法についてフィールドワークを通して学習するものです。ケアマネジメント論は4年生の科目で、ケアを必要とする人々のニーズと利用できる社会資源とを結びつけるケアマネジメントの考え方や連携を学ぶことをねらいとしています。在宅で療養している方を訪問したり社会資源を分析するなど、グループ毎にメンバーが役割を分担し協力しあってケアマネジメントを学習しました。地域への貢献については、これからまとめをする予定です。

### 2. 地域貢献部会

地域貢献部会は主に下北地域での研究活動を推進する部会です。今年度は石鍋教授が行っている、「遠隔地におけるリハビリテーションアプローチ」の研究を支援しています。

### 3. 現地対策部会

現地対策部会は下北地域での教育や研究、研修がスムーズにいくように、現地での様々な調整をしてきました。現地の関連機関への協力要請打ち

科目名	開催期間	開催地	学生数
保健福祉概論	7月12日～7月19日	風間浦村下風呂地区	学部生166名、編入生3名
保健医療ソーシャルワーク実習	8月7日～10月5日のうち12日間、90時間以上	むつりハビリテーション病院	—
地域統合実習	8月29日～9月7日	下北地域	—
地域理学療法学	11月実施	下北地域	—
医療福祉論	11月実施	下北地域	—
ケアマネジメント論演習	11月6日～11月10日	むつ市、大間町、東通村	4年生120名が参加

下北地域で実施された教育科目

合わせの調整、実習や演習実施のための詳細な打ち合わせの連絡調整などです。また現代GP推進会議、講演会を現地で開催するための準備と運営を行いました。このような連絡調整は、テレビ会議システムを用いて効率的に実施しています。現在テレビ会議システムは、本学、下北地域センター、むつりハビリテーション病院、風間浦村、東通村、などに設置しています。

この部会では現地の関係機関からの研修要請などへの対応調整もしました。今年度は5名の教員が下北地域での研修会に講師として要請にこたえ、講演などを行っています。

#### 4. 広報部会

広報部会は、新聞、マスコミなどへ連絡し現代GPの活動を広報する役割です。また、下北センターだより（写真；下北センターだより）を発行して活動を紹介してきました。

部会による活動以外に関係者全体の会議をと

して、本取り組みの評価方法の検討をしています。現代GPはあと2年在りますが、19年度は大学院生の参画、参画型教育の範囲拡大、健康教育の開催など、さらに活動の範囲を拡大していく予定です。

また、本事業にご協力くださった、下北地域の住民の方々、関連機関の方々、本学の学生、教職員にこの場を借りてお礼するとともに、今後とも協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。



ケアマネジメント論演習で在宅療養中の方を訪問。ケアプラン作成のため、家族の方にお話しをお聞きました。

# 下北地域センターだより

第3号 2006年9月4日  
青森県立保健大学下北地域センター  
むつ市山田町27-7 運動公園前  
TEL 0175 (29) 3155  
FAX 0175 (29) 5858  
E-mail [shimokita@auhw.ac.jp](mailto:shimokita@auhw.ac.jp)

## 第5回公開講座—生活と健康—開催される

7月29日(土)14:00~16:30、下北文化会館展示ホールにて、保健大学第5回公開講座が開催され、22名が受講されました。

人間総合科学科の松江一教授の講演は、青森県と世界のイカのこと、イカスミとタコスミの違い、イカスミの不思議についてなど、イカスミ研究の面白さを中心とした内容でした。また、人間総合科学科のアラン・ノールズ教授の講演は、コミュニケーションとは何か、地域社会でのコミュニケーションの役割、異なる言語や文化間でのコミュニケーションの問題などをわかりやすい実例を挙げて理解を深める内容でした。

それぞれの先生の講演の後、活発な質疑応答がありました。

- 図1 司会の石鍋教授      図2 公演中の松江教授  
図3 講演を聴く人たち      図4 公演中のノールズ教授



### 地域のイベント1

#### まさかりレガッタがむつ市で開催

県内唯一の大規模な市民参加型ボート大会「第8回まさかりレガッタ」がむつ市新田名部川で7月30日に開催され、今年には出場チーム60チーム約420人がエントリーしました。職場の仲間や友人などでチ

### 地域のイベント2

#### 大湊ねぶた祭りがむつ市にて開催

大湊ねぶた祭りが8月4日~6日まで行われました。この大湊ねぶた祭りは100年以上の歴史をもつといわれています。町内会や職場単位で、大人から子供まで多くが参加し、独特のリズムとメロディーの流し踊りと人形ねぶたの運行が行

## 第8回大学祭を振り返って

### はじめに

第8回青森県立保健大学大学祭は10月7日(出)と8日(日)に開催されました。

今年のテーマは、

「え？大学祭ですか？保健大でやってますよ」でした。このテーマは実行委員が考えたものです。堅苦しくなく、気軽に、親しみを持って大学祭に来てくれたら、という思いが込められています。

今年の大学祭は二日間とも天候に恵まれず、屋外の企画も全て屋内で行うこととなりました。また当日急遽内容変更を迫られた企画もあり、実行委員には大変頑張ってもらいました。大学祭実行委員会の皆さん・各企画に携わってくださった皆さん・大学祭に来てくださった皆さん、本当にありがとうございました。この場を借りてお礼を申し上げます。



オープニングセレモニー

### 大学祭を振り返って

実行委員会による企画には以下のものがありました。

- オープニングセレモニー
- お笑いライブ
- 園児絵画展示
- オープンキャンパスアゲイン
- 縁日
- 安生園との交流会
- 前夜祭
- 中夜祭
- 後夜祭

大学祭実行委員長(理学療法学科3年) 新山 珠里

この他に、お化け屋敷やフリーマーケット、作品展示等のサークル企画や模擬店もありました。外部企画として、日本原燃によるエネルギーコーナーや小規模作業所授産所の展示即売会が行われました。

今年は実行委員会の組織を早く行うことができ、企画内容も早い段階で決定することができました。その後は、各企画の担当者が責任を持って仕事を行ってくれました。

広報活動では、企業への連絡や協賛金の依頼を行い、多くの企業から協賛して頂くことが出来ました。また、パンフレットとポスターの原案も広報の委員が考えてくれました。パンフレットが完成してから名前のミスを発見したり、新企画が追加されてしまい大変ご迷惑をおかけしました。



模擬店

ここからは実行委員会による企画を中心に大学祭を振り返りたいと思います。

昨年の大学祭では無かった企画があります。それは前夜祭とオープニングセレモニーです。6日に開催された前夜祭では、昨年と一昨年の大学祭の写真をスライド形式で発表しました。また、ミス・ミスター&熟女・ダンディーコンテストの結果発表も行いました。コンテストは事前に全学生にアンケートを行い、その結果を発表しました。自分のクラスのミス・ミスターが発表されると歓声が起こり、見ていても楽しかったです。しかし、前夜祭の告知不足もあり、多くの学生に見て頂けなかったのが残念です。



ステレオカンパニーライブ

7日にはオープニングセレモニーとお笑いライブを企画していました。オープニングセレモニーも前夜祭同様初の試みでした。始まりの合図を行うことで大学祭を盛り上げたいという意見から実現した企画でした。オープニングセレモニーからお笑いライブへと続けるよう企画していましたが、前日からの悪天候により予定していた芸人さんが当日来られないという最悪の事態が起きてしまい、急遽オープニングセレモニーの内容も変更することとなりました。安生園入所者と津軽三味線サークルによる「りんご節」を発表する、交流会という企画もプログラムに組み込みました。また、津軽三味線サークルの演奏と手話サークルによる手話コーラスの発表も行っていただきました。青森公立大学よさこいサークルの演舞披露では、会場を大いに沸かしてくださいました。学長をはじめ、担当委員、突然のお願いにも快く発表を引き受けてくださった津軽三味線サークル・手話サークルの皆さんのご協力によって無事オープニングセレモニーを開催することが出来ました。中夜祭では、新たな試みとして各クラスからの出し物コンクールがありました。プロモーションビデオを自演したビデオ上映や、制服ファッションショー、ダンス、コント等といった趣向を凝らした発表をしてくれました。発表してくださった人たちの頑張りが伝わってきて、見ていた人もとても楽しめたのではないかと思います。この企画によって多くの学生が大学祭に参加して頂いたのが良かったです。大学祭二日目の8日は後夜祭があり、ステレオカンパニーによるバンド演奏が行われま

した。多くのバンドが演奏して大盛況のうちに大学祭を終了することが出来ました。

今回のステージ発表の音響・照明は全て学生で行いました。業者には頼まず、自分たちで機器の使用方法を覚えました。完璧に使いこなすことは出来ませんでした。事前のリハーサルを何度も行い、大きなトラブルを起こすことなく立派に裏方を務めてくれました。



縁日の風景

## 終わりに

昨年、一昨年と大学祭実行委員会に関わっていなかった私が、今回実行委員長という大任を受け持ちました。想像していた以上に時間に追われる日々が続き、実行委員にも迷惑をかけっぱなしでした。もっと自分に行動力があれば、リーダーシップがあればよりよい大学祭が作れたのではないかと悔やまれることもあります。それ以上に有意義な経験をする事が出来たと思っています。準備段階から大学祭当日まで様々なトラブルやアクシデントがありましたが、多くの方々のご協力によって乗り越えることが出来ました。

大学祭を通して沢山の方と出会うことが出来ました。人とのつながりの輪を広げられることは実行委員の特権なのではないかなと思っています。今回得た経験や物事のノウハウを来年の実行委員に伝えて、今年以上の大学祭にしてほしいです。

最後に、第8回大学祭に関わってくださった全ての方に、心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました！！

## 硬式テニスサークル

(顧問/松江 一教授)  
看護学科3年 木村 猛

硬式テニスサークルは、今年から本格的に活動をし始めたばかりのサークルです。去年までは、サークルの人員も少なくソフトテニスと一緒に活動していましたが、今年からは人数も増えてきたので「硬式テニスサークル」として活動を始めました。

硬式テニスサークルでは、学校にあるコート3～4面を使用して活動しています。雪が降るまでは外のコートで行い、雪が降ってきたら体育館の中で活動をしています。今は週1回の活動ですが、コートが空いているときであればいつでも自由に使用し活動することができます。雨が降っている日は、活動はしないことになっていますが、小雨程度であればやりたい人たちで活動しています。

活動内容は、球出し練習やサーブ&レシーブといったような基本的な練習を行ったり、試合が近くなると試合形式での練習も行っています。練習には先生が来て指導してくれていることもあるため、初心者の方でも大歓迎です。

試合は個人戦だけでなく団体戦もあり年間を通して様々な試合があります。初心者の方でも練習をすればすぐに試合に参加でき、いい経験ができると思います。また、サークルのメンバーは話しやすい人たちばかりなので、すぐに打ち解けられ仲良くなれると思います。

テニスを始めるにあたりラケットがなかったり、ラケットが高くて準備できないという方もいらっしゃると思います。ですが、サークルでラケットを準備してあるので心配は要りません。興味のある方は手ぶらで見に来ていただければ気軽に参加することができます。

高校でテニスをやっていて大学でも続けてやりたいという方やテニスを大学から始めてみたいという方はぜひ活動に参加してみてください。

## 武術サークル

(顧問/千葉たか子助教授)  
社会福祉学科2年 室館 洋史

わたし達は、「武術サークル」ってサークルです。今、男女合わせて大体5人くらいで週1回のペースで活動しています。武術といってもピンとこない方が多いと思います。簡単に紹介しますと、色々な武術に取り組んでみようというサークルです。目的は、「心身の向上」や「護身の為」、そして何よりも体を動かすことが「楽しい」ので活動しています。

現在、取り組んでいる武術は「合気道」「柔道」「スポーツチャンバラ」などを定期的にやっています。ただ、これらの武術だけをするのではなく、サークルメンバーからの希望に応じて、他のさまざまな武術にも挑戦していきたいと思っています。また、これから「護身術」ってやつもやっていこうかなと思っています。

このサークルの特長は、とりあえず無理をしません！いつもサークルメンバーでだらだら談笑してから開始しています。談笑しすぎて活動を少ししかならないって時もたまにあります(笑)そして、武術をやる前には、ケガが無いよう、準備運動と受身はしっかりやっています。受身がわからない人には、きちんとできるまで教えていきます。基本的に受身を覚えれば何でも出来ちゃうんですよ！雪道で滑って転んでしまったとしても受身があれば頭打つなんてことはないですね。また、サークルメンバーの意見を最大限に尊重して、活動内容・活動時間を決めています。基本的にこのサークルは、「みんなが楽しくやればそれでいい」っていうポリシーで活動していますんで、気軽に武術サークルに足を運んでみてはいかがでしょうか？



ある日のサークルメンバー

## SMILEサークル

(顧問/益田早苗助教授)  
看護学科3年 長瀬 由季

私たちSMILEサークルは、ピアサポーターとして10代の男女と交流をしています。

ピアというのは仲間という意味です。中高生の性のことや大人のカウンセラーに話しづらいことを、近い年代の私たちが一緒に考えていくことを目的に活動しています。また正しい知識を提供し、ピアの役割を果たすために研修会も行っています。

主な活動の一つが高校でのピア活動です。高校へ訪問し、グループワークをしたりコミュニケーションをとっています。また、一般の人に関心を持ってもらうために学校祭でブースを設けています。今年は温泉で楽しく研修会合宿をしてきました。研修会では、カウンセリングの方法や、10代の性について学び、そしてロールプレイをしながら、お互いにアドバイスし合います。

これからは、もっと活動範囲を広げていき、さらに、私たちも技術も磨いていこうと考えています。



SMILEサークルメンバー

## OMUNI♪BATHサークル

(顧問/増山道康助教授)  
社会福祉学科3年 工藤 絵里佳



学祭では棒パンを販売しました

OMUNI♪BATHサークルは昨年12月に立ち上げた新しいサークルです。OMUNI♪BATHは「オムニバス+お風呂」という意味で作った造語です。

入学以来何か物足りなさを感じ、不完全燃焼気味でした。夢に描いていたキャンパスライフと、現実のギャップに悩んでいました。

そんな時、素敵な先輩と出会い、どんな時でも信頼できる仲間がいれば楽しいものになる、ということに改めて実感しました。

このままじゃ後悔する！という熱い思いがこみ上げ、その先輩達と一緒にサークルを作ることになりました。活動内容は温泉を通じて健康増進を図り、裸の付き合いのできる真の友情を育み、仲間をつくる、とかなり格好いいものです。でも本気です。薄っぺらな関係なんて望んでいません。上辺だけの付き合いなんて、もうまっぴらです。今までには奥入瀬にいて、帰りに葛温泉に行きました。

でも新しいサークルなので、運営方法や活動内容はまだ手探りの状態で、地盤が固まっていません。同じ志をもった人同士で、ぜひこのサークルの活動内容をしっかり固めていきたいと思っています。活動力、行動力のある方、大募集です。「大学楽しかった。あの人と出会えてよかった。」とメンバーが思ってくれるサークル目指して、これからも地味に、地道に活動していきます。

## 高校教育と大学教育の 連携について

健康科学部長 佐藤 秀紀

昨年度より、保健大学と青森東高校との高大連携事業が開始されている。昨年度の受講生は、2年次生16名であったが、今年度は24名が本学学生とともに学び、修了後に高校の単位として認められている。

生徒の受講科目は、「グローバル社会と文化」「医療人類学」「理学療法原論」「社会福祉学概論」の4講座で、一人1講座を受講とした。開講時間はいずれも6時限目(17:10~18:30)とし、高校の授業終了後に受講できるようにした。期間は4月から7月までとし、受講料は両校間の合意で無料とした。

この講義は高校生用にアレンジされていない大学の通常のものである。レポートの提出など、高校生にとってかなりハードな内容であるにもかかわらず、全員が修了できたのは、生徒の意識の高さと努力があったからこそと思われる。

今回も受講生の多くは、医療、福祉分野への関心や進路希望が強い一部の生徒が対象となっている。しかし、その一方で、高校とは異なった講義を聴講することで、生徒の知的世界をひろげるという側面も必要であると考え。「専門知識の先取り」というよりは「学問への動機づけ」という考え方もまた必要である。受験勉強以外のアカデミックな学問に接すること、このことで、学問への進路選択に結びつけなくてもよいものとする。

高校側は対象生徒を限定する必要はないし、受け入れ側である大学もどのような進路を考えている生徒であっても受け入れるというコンセンサスが必要であると考え。

コモン・スキルの上での、大学生と高校生とのレディネスの差を低減させる目的で、今年度、新たに設計した指導上の戦略は、図書館蔵書検索・文献貸出体験ツアーとレポートの書き方講座でした。これらはいずれも自由・任意の参加としましたが、受講中の生徒7名全員が積極的に受講してくれました。これらのメニューが、授業後の提出レポートの作成に確かに生かされたことは、大変有意義なことであり、7名の満足度が高いことは、アンケート中の「高校の授業では普段体験できないことを学べた」、「授業の理解が進んだ」という感想等からも、読み取れました。

また、今年度も、授業評価コメントの中で、「授業に参加し、大学生活への希望と夢が以前より大きくなった」との率直な意見を生徒さん達が示してくれていました。この一定の評価は教養科目として、学習者の大学教育への円滑な導入と理解の深化を基礎的に支援する上での、教育的成果の一つと捉えられます。本学で本格実施の段階に入った高大連携事業ですが、今後もレディネスの調整や学習過程分析、進路選択上の意義の分析、高校教育における学習との連結の関係性、相互授業研究等の側面から発展的に、本取組のよりよい在り方の検討を続けたいと考えます。



修了式における学長からのあいさつ

## 人間・文化・社会探究の視座と 高大連携の方略

人間総合科学科目講師 浅田 豊

試行段階としての昨年度と比較して、今年度の授業で発展させた箇所は、主に、教育評価の充実を図った点です。本学学生に対しては、主に毎時のグループワークへの参加度、調べ学習に基づく学習成果発表、最終のレポート提出を総合的に判断するという方法を一貫して続けていますが、高校生さんにも任意ではなく、レポートの提出を求めました。グローバルな視点から人間・文化・社会を考察する意欲あるレポートばかりでした。

レポート作成の準備に先だち、アカデミック・

## 「病む」こと

看護学科教授 大関 信子

私たち看護師や理学療法士は疾病を持つ人々を対象とし、保健師や社会福祉士は地域で健康問題を抱える人々と関わっていきます。人間が「病む」とは、どういうことでしょうか。「病む」ことの正常と異常の境界は非常に曖昧で時間と状況により流動的です。ちょっと風邪気味でも、栄養ドリンクを飲んで頑張れば自然に治癒することもあります。また、同じ状態でもクリニックに行くと「診断名」がつき、自宅安静3日間と言われれば急に「患者」になります。また、風邪の治療法も多種多様で、



人々の育った地域やその家族の『文化』によります。風邪なら梅干茶や玉子酒と祖母の代から伝わっているその家独特の養生訓のようなものがあります。そこには病む人を思う家族や周囲の人々の「ぬくもり」があります。

医療サービスのプロを目指す1年生には、人間が「病む」ということ、そしてその「病む」人を取り巻く人々の「ぬくもり」と先人の知恵を考えてもらいたいと願っています。元気はつらつな1年生にとって「病む」こと「死ぬ」ことは、想像するのも困難かと思えます。しかし、人間は「病み」そして「死」に直面します。「病み」「死」を迎える人、そしてそれを取り巻く家族や周囲の人々の「ぬくもり」と、その文化の中で传承されているケアのあり方を理解することが医療の原点であることを伝えたいと思っています。

高校生と一緒に人間の原点である「病む」こと、「死」を迎えること、「病む人を思う周囲の人々の思い」そして「伝統的ケアのあり方」を考えることができるのは、本学学生にとっても教員にとっても大きな喜びです。

## 高大連携授業を終えて

理学療法学講師 盛田 寛明

高大連携授業として、理学療法学科の「理学療法原論」では9名の青森東高校生を受け入れた。この授業では、理学療法の全体像や理学療法士としての資質など基本的な内容を学ぶことが目的であった。毎回の小テストやレポート、病院見学やグループ研究が課され、高校生にとって負担増となることを懸念したが大部分の受講生は大学生に負けず劣らず頑張っていた。病院見学では、実際の理学療法の場面に接することで、障害を持つ方々とその生活環境について理解を深めるとともにチーム医療における医療専門職種である理学療法士の姿を具体的に目にすることができ、高校生にとっては新鮮な体験だったであろう。また、特に苦労したのはグループ研究とレポートであったのではないだろうか。自分で言いたいことを決め、資料を探して読み、整理して考え、発表して原稿を書くという過程を経る必要があったため、授業中に戸惑っていた場面も少なからず見受けられた印象がある。この、自分で疑問を追求し、問題解決する意識をもつことがこの授業の目標の一つでもあった。教師から教えられるという受け身でなく自分から主体的に考えていくことの重要性を、高校生は痛感したと思う。

高校と大学が円滑な連続性のある教育を行っていくためにも、高校生が大学レベルの授業内容に触れる機会が増加していくことは望ましいと考える。今後の課題として、高校の試験準備のために

大学の授業を全員欠席するなど高校生にとって負担となる場面がみられた。「高校生にとっての参加のしやすさ」と「大学の各学問分野の特質に対する十分な理解」を両立させることができる高大連携プログラムの推進が望まれよう。



修了式における参加生の言葉

## 高大連携と社会福祉学概論の授業改善

社会福祉学科助教授 増山 道康

社会福祉学概論は通年授業であり、1年間30コマで講義が完結する。シラバスも、前期後期の一体性を保った授業構成を志向していた。

ところが、高大連携授業は、前期で完結する必要がある。2005年度の高大連携授業は、その点での工夫が乏しかった。その反省に立って、2006年度はシラバスの一部を組み替え、前期と後期が一定になるようにした。また高校生は他の専門支持科目を受講していないために、社会福祉についての総合的な理解が困難となるので、他の科目で授業されている内容についても多少の概括をするようにした。

こうした結果、2006年度のシラバスは、前期は、大学一年生と高校生が等しく社会福祉への関心が高くなるような内容を志向し、社会福祉の理論、理念、歴史といった総論と各分野・領域への導入が柱となった。最初と最後の数回で各分野・領域への導入を行い、中間に総論に当たる内容を挟み込む、サンドイッチ型ともいうべき構造となっている。後期は、政策論と実践論が柱となり、福祉職としてのキャリア教育の基礎も志向した。

教科書も昨年までの分野・領域の解説に重点を置いた概説的なテキストから、概念、基本理念、歴史について詳述しているものに変更した。あわせて、補助教材も工夫し、理論、理念や歴史については、原典もしくはその翻訳書の抜粋を配付するように努めた。

授業の組立てと補助教材の活用によって、授業の水準を落とさず、また内容を簡略化することなく、高校2年生にも理解しやすい授業を目指した。

## 国際交流での素敵な思い出

理学療法学科3年 熊澤 佳子

私は、今年の8月に韓国仁濟大学校との国際交流のため韓国へ行ってきました。国際交流の主な内容は病院研修で、韓国と日本の理学療法の違いを体験できるよい機会となりました。患者さんとも交流する事ができ、有意義な時間が送れたと思います。現地の学生も、病院研修が終わった後に韓国料理を食べに連れて行ってくれ、週末には観光地へ1泊の旅行にも連れて行ってくれました。私たちは言葉は通じませんが、お互いに分かり合おうとした事でよい信頼関係を得る事ができ、ここで得た友情は本当に貴重なものとなりました。

私にとって韓国で過ごした1日1日が素敵な思い出となっています。そして、そんな思い出を作ってくれた韓国の方には感謝しています。ホストファミリーや韓国の友達と別れる時、別れの悲しさから涙が止まらない私に、友達が「またすぐ会えるよ」と言ってくれました。私はその言葉を信じて、次に彼らに会える時を楽しみにしています。



パク病院のスタッフと

## 仁濟大学の研修を通して得たもの

理学療法学科3年 佐藤 彩乃

私は今年の8月に韓国の仁濟大学校の研修に2週間行ってきました。初めての海外研修ということもあり、戸惑いを抱えながらの出発でした。し

かし、釜山駅に到着した時に、仁濟大学の学生達が私達を暖かく出迎えてくれて、それまでの緊張をほぐすことが出来ました。

滞在した2週間のうち、8日間は病院実習でした。私は最初の3日間は運動療法、次の2日間は水治療法、最後は物理療法の実習を行いました。日本では水治療法を体験する機会があまりなく、実習で患者さんと一緒に水中で訓練したことはとても貴重な経験になりました。物理療法においても、超音波治療を行った際は、患者さんと交流も出来たことがとても嬉しかったです。病院実習で印象的だったことは、治療中家族も一緒に付き添っているということで、家族も積極的に治療法を理解しようとしている姿勢が見られ非常にアットホームな雰囲気を受けました。病院のPTの先生達からも様々なことを教わり、とても勉強になりました。実習が終わった後、ホームスティ先の学生が釜山の有名な場所を案内してくれました。ホームスティでは韓国料理をふるまってもらい、家族との団らんの時間を設けてもらいました。休日は仁濟大学の学生たちが慶州まで連れて行ってきて、楽しい2日間を過ごしました。

仁濟大学の研修を通して、私は多くの人と交流する機会と貴重な経験を得ることが出来ました。たくさんの人への感謝の気持ちを忘れず、この経験を将来へと活かしていきたいです。



慶州にあるお寺にて

## 2006年夏はイングランドに行きました

看護学科2年 櫻田 直也

私は、今年の夏イングリッシュコミュニケーションの授業でイングランドに行きました。私は語学力を少しでも高めたくて行きました。また、少しでも多くの異文化に触れることが出来ればと思い参加しました。

では、私のホームステイの生活を少し紹介したいと思います。私のホームステイ先は、ショーン・コネリー似のおじいさんと二人暮らしでした。始めの頃は、おじいさん一人だったので、食事とか家事にとっても不安がありました。しかし、おじいさんは料理から洗濯、掃除まで全て一人でこなす自立したおじいさんでした。しかも、毎日の料理がピザやパイ、デミグラスハンバーグ等といった外食でなければ食べられないような美味しいものを作ってくれました。今でもあの味は忘れられず、2度とは食べられないと思うと残念です。

次に、私の学校生活を紹介したいと思います。私の学校はユーロセンターと言う語学学校で、遠いところは韓国・中国といったアジアから、近くはフランス・ベルギーといった様々な文化の違う人たちが英語を勉強しにやってくる場所です。その中でも1番仲良くなったのは韓国から来た留学生達です。国も近くて親しみやすく、一緒にお酒を飲みながら語りあった日もありました。ちなみに、イングランドは18歳からお酒が飲めます。

海外授業で最も印象に残ったのは、ツアーで行ったストーンヘンジです。ストーンヘンジはイギリス南部のソールズベリー地方にある巨石遺跡で、約3600年前のものだそうです。45トンもある大きな石が正確な形に並べられていて、造られた目的も方法も明確ではない不思議な遺跡です。言葉では言い表せないような異国情緒溢れる場所で、純粋に感動しました。ぜひ、イングランドに行ったら訪れてみてください。イングランドは日本と違い、地震が少ないため多くの歴史建造物が残されています。

行く機会があれば、イングランドにまた行きたいと思います。サッカー好きな人には、イングランドは楽しくてしょうがないと思います。ただ、イングランドは物価が高く、すぐお金がなくなるので出来れば次回は日本より物価が安い国に行きたいです。



クラスメイトと食事

## 海外授業 in UK

看護学科3年 掛端 礼子

私は今回、イギリスへ海外授業に行ってきました。3週間という日々はとても早く過ぎ去り、多くの経験と学びを得ることができました。ショッピングをする時も、ご飯を食べる時にも、英語を話します。伝えたいこと、聞きたいことがなかなか通じず苦勞する時もありましたが、そんな中でする店員さんとのちょっとした会話が楽しくもあり、毎日が新鮮なものでした。

3週間のメインとなるのは、やはり学校での授業です。1クラス15人程度の少人数制で、英語を学びたいという私たちと同じような目標をもった学生が、世界中から来ていました。私が学んでいたクラスには、ドイツ・イタリア・スペイン・ブラジル・韓国などから来た人々で、年齢も様々でした。このような世界中の友達と、共通語である英語を使って、彼らの母国について語りあったり、私の母国である日本について話しあったりすることで英語圏以外の国の人々の文化や慣習について理解を深めることができ、英語のすばらしさを再確認することができました。

その中でも、この海外授業で一番得られたものは、何事にも恐れずにチャレンジする事です。なぜなら、言語が違うからといって話しかけるのをためらっては、多くのチャンスが失われてしまうからです。失敗を恐れずに、チャレンジすることは自分の可能性を広げる第一歩となることを心にとめ、今後も歩んでいきたいと思っています。



クラスメイトと授業の後で

## 第5期生の就職活動最前線！

学生部長・就職対策委員長 鈴木 孝夫

例年この時期、内定通知を頂いてホッとする学生、いざ出陣と緊張した眼差しで就職試験に向かう学生、と4年生の就職戦線も佳境を迎えています。本学では、学生諸君に対する就職対策・支援として主に以下の事業を行っています。

### 1. 学科別就職ガイダンスの開催

各学科の特性に即した就職指導を行うため、3年前・後期と4年前期に学科別に実施しています。

### 2. 就職合同説明会の開催

学生（3・4年生）が、病院や社会福祉施設の人事担当者と直接面談して情報交換をする場であり、高い就職率の維持、県内定着率の向上などを目指し、今年度は3回開催しました。

### 3. 面接・小論文試験対策

各学科の卒業研究担当教員及び人間総合科学科目教員等が中心となり、面接や筆記試験等に落ち着いて冷静に臨めるように、模擬面接、小論文添削、面接カード（エントリーシート）記載などについて、学生一人ひとりに個別の指導を行っています。

#### 【5期生就職内定状況 単位：人】

H18.12.15現在

学 科	卒業予定者	就職希望者	就職内定者
看護学科	103	99	73
理学療法学科	19	19	11
社会福祉学科	43	41	10
合 計	165	159	94



就職合同説明会

## 3学科学生へのキャリア設計支援・実践指導の成果

就職対策委員・人間総合科学科目講師 浅田 豊

第4期生への本格的な就職対策・支援を経て、第5期生の就職活動が着実に進む現在まで、筆者は3学科との連携のもとで4年生への面接指導にあたっている。それは3学科と人間総合とが、学生個々に異なる達成目標や差し迫った学習ニーズを踏まえつつ、専門・リベラルアーツの両領域から、相互に綿密な連携を図ることで、指導上のより高い効果が期待されるからである。学内の連携とは即ち、全学を挙げての一丸となった就職対策の取組が長く積み重ねられてきていることを示唆し、また次の5つの構成要素の相乗的統合に結実するといってもよい。5つの要素とは第一に、毎年度前期に実施している3学科別の面接対策に関わるシミュレーション的な「ロールプレイ学習」が挙げられる（写真）。次に、各学科就職支援チーム・卒業研究担当教員等による「学生相談・指導等」、及び筆者を含む当該教員からの「対面式個別面接練習・添削・助言」が展開される。これらの教職員からの支援は、常に学生主導の自己管理的学習と結び付いている。小論文作成等に関する学生個人やグループでの「独立的かつ継続的学習活動」、及び友人同士や学生間の「相互補完的面接練習等」がそれに相当する。

とりわけ第3番目に挙げた個別面接練習は、「質疑応答に見られる論理性・判断力」「明確な志望動機の説明・解説能力」「即戦力としての確かな専門性」「あたたかい人柄・誠実さ」「コミュニケーション能力の高さ」といった3学科学生の優れた諸特徴を改めて知るきっかけにもなり得ている。自分の実体験や自身の看護・理学療法・社会福祉観に基づき、就職後に行いたいケアやサービスについて、素直に伸びのびと回答できる学生が多い。また、これらの諸特徴はさらに涵養・支援すべき観点でもある。さらに、小論文の添削では「原稿用紙の正しい使い方」や「品詞・文法使用の適切性」はもとより、「課題内容の理解度」「説明や論理の緻密さ」「全体構成力」「独創性」といった観点から指導にあたっている。学部時代の就職活動への取組は、生涯のキャリア形成の礎と成りうる。その意味からも、一人ひとりの学生が全力を出しきることができ、悔いの残らない取組となるよう、今後も総合的な支援を続けたい。



4年生就職ガイダンス

## MESSAGE FROM GRADUATES

## 看護師になって…

寺澤 るみ  
(看護学科4期生)

看護師として働き始めて、気がつくや半年以上経っていて、本当にあっという間でした。初めはわからないことだらけで、こんなに責任のある仕事をちゃんとやっていけるのか、不安でいっぱいでした。でも先輩方の指導を受けながら、一日一日新しいことを覚えていくうちに、少しずつですが看護師としての自覚と自信がついてきた気がします。

私が働いている病棟は内分泌科で、糖尿病患者への教育的関わりが求められます。また、検査や治療、病態などについて自分がよく理解していなければ、患者さんの不安を軽減させることもできません。初めのうちは何を聞かれてもうまく説明できず、不安に応えることもできない。それが怖くて患者さんや家族と向き合うことから逃げていた気がします。コミュニケーションをとることに知識が必要であり、自分の知識のなさや無力さを痛感しました。でも、少しずつ知識を身につけていくうちに、ようやく患者さんの気持ちや生活背景にまで目を向けることができるようになってきました。

ひとつ新しいことを覚えては、またわからないことが出てくる。そんな毎日が続いていますが、ひとつひとつ確実に身につけていき、少しずつでも成長していきたいと思っています。

## MESSAGE FROM GRADUATES

## 卒業して思うこと…

中村 あゆみ  
(理学療法学科4期生)

卒業して早くも半年が過ぎてしまいました。あっという間に大学四年間が過ぎたように、時の早さを身にしみて実感している今日この頃であります。

就職して、理学療法士として働き、半年間の間でさえ多くの人に出会うことが出来ました。私の勤務している病院は、一般病棟と回復期病棟があり、高齢の方が多く入院されている病院です。患

者様を目の前に、分からない事だらけで、頭を抱える毎日です。しかし、優しく楽しいスタッフ・患者様に恵まれ、学校では学べないことを、手取り足取り教えていただき、支えられながらPTとして成長している最中であると感じています。PTは希望を持ちながらも、現実を見落としてはいけないということを最近痛感しています。熱意だけでもダメ、知識・技術だけでもダメ…その人の人生の一部に介入してしまうことになるわけで、責任を強く感じます。自分の技術・知識の無さを悔やむことは毎日の日課ですが、人生の先輩である患者様にいつも癒され、励まされています。これからも、周りの人に支えられながら、PTとして人間として大きく成長したいと思います。

## MESSAGE FROM GRADUATES

## 就職して…

舘 麻衣子  
(社会福祉学科4期生)

私がデイサービスセンターに生活相談員として勤務し、もう半年が過ぎました。働き始めの頃は、実習生ではなく、いち社会人として周囲と関わっていく責任と、経験がないまま生活相談員を務めなければいけないプレッシャーで、毎日に余裕がありませんでした。ただがむしゃらに仕事を覚えようと努める日々で、失敗しては深く落ち込み、それでも職場の方々の助言や指導、励ましがあって、今ではほんの少し自信が出てきたように思います。

仕事をしていて一番大変なのは、その時の利用者者に最適な援助を提供し続けるために利用者一人ひとりの日々の心身の状況の変化を把握していなければいけないことです。そのために、様々な場面において、利用者の様子を観察し、変化を見逃さないように心がけています。また、職場の職員間でもサービス内容をよりよく改善していくためにその日の課題を話し合い、様々な援助の試行錯誤と反省の繰り返しの毎日です。

就職して半年、まだまだ未熟な私ですが、「生活相談員」の名に恥じぬよう皆に信頼される人を目指して、利用者・家族の皆様と誠実に関わってきたいです。

### 「この学生さんに出会わせてくれた 全ての人に感謝するわ」

看護学科助教授 角濱 春美

実習指導をする中で、学生への感謝のことばや、患者様の温かいメッセージを、数え切れないくらい頂いて来ました。その中から一つ選んでお話ししたいと思います。その患者様は辛い治療は何か乗り越えたのですが、普通よりも身体の回復が遅れてしまい、「なんだか億劫なの」と気分的に沈んでしまい、食事が進まない状態でした。この方を受け持ったのは1年生の学生でした。なんとか一口でも多く食べていただきたい。と学生は思いました。患者様の傍に自然な笑顔で寄り添い、食事の時には明るく声をかけ、少しでもお腹がすくようにと院内を一緒に散歩するようになりました。

二人で連れ立って歩いてくのを、私も、看護師さんたちも温かい気持ちで見守っていました。一進一退ではありますが、少しずつ食べようという意欲が出てきて、「こんなに食べられたよ」「このごろは歩くのも億劫じゃないよ」という言葉も聞かれ、表情も活き活きとしてきました。しかし、実習にはどうしても期限があります。実習の最終日、受け持ち患者になっていただいたお礼のために訪れた私は、涙で目と鼻を真っ赤にした患者様に「この学生さんに出会わせてくれた全ての人に感謝するわ」と涙ながらに言われたのです。この一言を聞いて、私も涙がこらえきれなくなりました。ナースステーションに戻ると、学生が目も真っ赤でした。技術も未熟で知識も少ない1年生がどうしてこれほどまでに人の心を動かすのだろうかといつも不思議に思います。人を思う純粋な気持ちというのは伝わるのではないかと感じたりします。

相手を思いやり、いたわり、なんとかお役にたてないだろうかと思う、『看護の心』をこれからも実習をとおして伝えていきたいと思っています。

### 実習に伴う学生への感謝の言葉

理学療法学科助教授 勘林 秀行

理学療法学科では3年生の1月初旬から4年生の7月中旬にかけて、3カ所の病院等でそれぞれ約6週間の総合臨床実習を行う。それまで学内中心に学んできたことを臨床の場でベテラン理学療法士の指導を受けながら実践し、技能を身に付けるというものである。

学生たちは全く新しい環境の中、数人の患者さんを受け持ち、理学療法士になるための総仕上げとして必死に取り組む。知識はあっても目の前の患者さんになかなか応用できず、指導を受けながらも試行錯誤を繰り返し、時には冷や汗やら涙やらを流すこともある。

患者さんからすると、孫のような歳の学生が数週間にわたって、自分を何とか良くしようと奮闘する姿に、勇気づけられ、愛おしくさえ思うことがあるようである。

我々教員が実習先を訪れた際に患者さんから声をかけ

られることがある。

「あの学生さんには本当に良くしてもらって、お世話になりました。感謝していたと伝えてください」、「あの学生さんどうしてる？彼はきっといい先生になるよ。だって、私がこんなに元気になったの、学生さんのおかげだよ」

最近ある指導者の方から、

「あの患者さん、学生といるときはなんだか活き活きして、一生懸命リハビリするんだよね。時々学生に『もっとこうの方が良い』なんて注意しながらね。患者さんもすっかり気持ちが元気で前向きになったよ。」

これはほんの一例である。

### 実習を通して学んだことを活かし 精進していきたい…

社会福祉学科4年 北山 賢治・三浦 淳子

私たちは3年次の社会福祉援助技術現場実習の際に、社会福祉法人藤聖母園特別養護老人ホーム藤の園と、同法人の合浦デイサービスセンターで実習をさせていただきました。

実習での一番の思い出は、デイサービスセンターでのレクリエーションです。レクリエーションの企画と進行をさせていただいた際には、手作りの輪投げを使ったゲームを利用者さんと一緒にやりました。ごこちない進行ではありましたが、職員の方々が盛り上げて下さり、体調の悪くなる利用者さんも出ずに無事にレクリエーションを終えることができました。参加した利用者さんに感想を聞くと楽しかったと笑顔で答えてくれたので、とても嬉しかったです。また、仮装して花笠音頭を踊った際には、大変盛況でありました。

デイサービスセンターでの実習は、5日間という短い期間ではありましたが、多くの貴重な体験をさせていただき、充実した実習となりました。職員の方々はもちろん、利用者さんのおかげで、楽しみながら勉強することができました。

実習終了後、デイサービスセンターでのお世話になった利用者さんが大学へわざわざお褒めのお電話を下されたそうで、大変恐縮しております。勉強させていただいた上に、お褒めのお電話をいただき、大変有難く思います。実習をとおして学んだことをこれからの勉学へ活かし、精進していきたいと考えています。



仮装して花笠音頭を踊る図

## 修士論文中間発表会について

教務学生専門部会長 藤井 博英

平成18年度修士論文中間発表会が、10月12・13日の両日、教育研究C棟2階 N講義室1で、平成18年度博士前期課程修了予定者21名の方々による発表が行なわれた。発表テーマは、ケアに関する研究、健康の維持・増進に関する研究、保健に関する研究などでありました。発表時間は質疑応答を含め1人あたりの持ち時間20分（口頭発表10分、質疑応答9分、交代1分）という短い中で、これまでの研究内容を発表し、質疑応答も活発に行なわれた。質問内容は、発表内容の根拠（裏づけ）や数字や結論の妥当性を打診するもの等々であった。質問に答える院生も自らの考えを素直に述べ、教員や他の院生からのアドバイスや評価を真摯に受け止めており、次へのステップへとつなげていける大きな糧になったと確信している。

中間発表会は、これまで研究を進めてきた修士課程2年生が、テーマや構成について教員をはじめとする他の人々から客観的に評価され、自己の凝り固まった考えや矛盾など自分の小さな世界を見直すことが目的である。特に構成や私見の立て方については、独りで書き進めている中で、極端に視野が狭まり、間違った方向に進んでもなかなか気づかないものである。その軌道修正をおこなえる貴重な機会である。また、社会人の方々は、日々、時間の遣り繰りに四苦八苦していると思います。そのような中だからこそ、研究対象や研究方法、興味関心も違う他分野の方々と、実際に顔を合わせ、互いに刺激し合い、自分の研究を発表するといったことが必要なのだと思う。さらに、修士課程1年生は、自分の研究の構想に役に立ち、計画を立てる際の目安になる。また、すべての参加院生にとって質疑応答の練習の場、効果的なプレゼンテーションはどのようなものかを、体験的に学習する機会である。

本年は、今回の発表で学んだこと、収穫したことを活かし、来年2月に予定されている研究成果の発表会では、効果的で満足のいくプレゼンテーション、そして発表成果をあげられることを期待している。残された時間を有効活用し、修士論文完成に向けての追い込みをかけ、最後まで頑張ってもらいたいと思う。また、院生には、自らの研究を発展させ、保健大学の発展に寄与し、更には保健・医療・福祉の発展に寄与する者が誕生してもらいたいことも併せて願う。



中間発表の様子

## 私と仕事と大学院

大学院博士前期課程2年 小林 昭子

仕事と学校の二足の草鞋生活も、早いもので終盤にさしかかろうとしています。私は県立病院の心臓血管外科で看護師をしながら、その合間を縫って大学院に通っています。この二つの両立の難しさに、何度涙を流したことでしょうか…。そんな中、手を差し伸べてくださった沢山の心ある人々に支えられ、これまで頑張ってくることが出来たのだと感じています。

今は修士論文の作成に悪戦苦闘している最中です。私は、心臓手術を受ける高齢者についての研究に取り組んでいます。それは、心臓手術を受ける高齢患者様が発した「看護婦さん、本当は手術なんかしないで残りの人生を私らしく生きたいんだよ。」という訴えからでした。「その人らしい生き方とは…」このことが私の頭を巡り、看護師として自分が何をすべきなのかが分からなくなり、答えを探しにここへやってきました。きっと、この限られた2年間という時間の中で、その答えが出るものではないのかも知れません。しかし、研究だけではなくこの大学院生活という時間を通して私は様々な人達に出会い、その答えのヒントを貰えた気がするのです。大学院とは、学び考える場所、研究する場所、人と出会い成長していける場所なのだと思います。そして、どのような時間にも意味があり、様々な人や出来事に出会うべくしていつも自分はその場所にいるように思えるのです。

今後は論文の完成と卒業を目指して、ラストスパートを大切な仲間と頑張っていきたいと思っています。そして、自分がここで学んだ沢山のことを、苦しみの中にいる患者様や、悩み葛藤している看護師さん達のために、少しずつでも還していけたらと思うのです。



ゼミの風景

## 病を通して考える私の生き方

講師 長濱 晴子氏

講師 長濱 直氏

今年度の看護学科特別講義は、講師に長濱晴子先生、長濱直先生ご夫婦をお招きし、10月23日に開催されました。晴子先生は看護師として米国で研修後、臨床、看護行政に携わり、参議院議員の政策担当秘書もなさいました。その途中、重症筋無力症と診断され、入院治療、民間療養を経験された中から、自分にあった療養法を工夫し、執筆・講演活動や夫君の活動支援などに活躍されています。また、直先生は永年勤められた会社を早期退職なされ、日本バイオペレッジ協会を設立し、中国内モンゴルの砂漠化防治事業をされています。(写真の晴子先生はモンゴルの民族衣装を着用しています)

今回は、晴子先生が「病を通して考える私の生き方」として経験から学ばれたことや、看護についての思いを、直先生はご家族として体験を共有し、支えてこられた思い、お考えなどをお話くださいました。講義中には、野菜作りなど土とのふれあいからエネルギーをもらったという作業中のお写真や、腹式呼吸法として取り入れたという歌を披露くださったりと、聴講した学生・教員約100名も圧倒されるほどとてもエネルギーがすごかったです。

“病気には意味があると思えることでプラス思考になり、人生を変えていく” “家族は戸惑いながら、患者とともに乗り越えることで成長・喜びがある”とお話になった時、そこに自分は看護師としてどう関われるのだろうか、あらためて考えさせられました。晴子先生の期待される「患者の一步先を歩けるナース」、「病気も、人間も、さらに心も看(み)えるナース」を目指し、学生の皆さんにも伝えていけるよう頑張らねば…。

(文責：看護学科講師 藤本 真記子)



講師の長濱晴子氏(右)と長濱直氏(左)

## プリオン病の謎

講師 布村 仁一氏

理学療法学科では、黒石市国民健康保険 黒石病院 神経内科部長 布村仁一(ぬのむら じんいち)先生を講師として招聘し、6月28日特別講義を開催しました。

布村先生は、神経内科の診療と研究の第一線で長年活躍され、顔面けいれんのボトックス治療では、青森県内で特に有名です。また、近年注目されてきたパーキンソン病患者の嗅覚障害など、幅広い研究テーマに取り組んでおられる先生です。今回は「プリオン病の謎」と題して、自らご経験された、クロイツフェルトーヤコブ病の豊富な症例を呈示しながら、その病因、診断、対処療法などについてわかりやすく解説されました。最近の話題として、狂牛病(ウシ海綿状脳症BSE)との関連についても、わかりやすく解説されました。今年、解禁となったアメリカ合衆国産の牛肉のどのような点が危険で、またどのような部分なら安全なのかについても講義されました。

講義の後半、さらに話はタイトル通りに「プリオン病の謎」へと進みました。すなわち、生物の遺伝子の本質である、DNA(デオキシリボ核酸)やRNA(リボ核酸)を全く含まない、いわゆるプリオンというものが本当に感染性を持ちうるのだろうかという疑問点です。そういう異常たんぱくが体内で増加していくということは、DNAから遺伝情報がRNAに転写されて、その後たんぱく質ができる(翻訳)という生命のcentral dogmaに反することを意味します。既に、プリオン説を提唱したプルジナー博士は1997年にノーベル賞に輝いていますが、central dogmaに反する「無謀な学説」だという指摘も少なからずあります。現在、プリオン説を擁護する論文はたくさん出てきて、その学説を否定するような研究はよほど確からしい証拠を積まないと陽の目を見ないのが実情です。例えば、ヤコブ病の感染実験でガジュセック博士がノーベル賞に輝いたのは1976年で、その頃から、ヤコブ病はウィルス感染症と信じられていました。20年後にウィルス説は翻りましたが、さて今回のプリオン説は20年後どうなっているでしょう。その真偽が判明するのは、講義を聴講した学生達が年老いるころかも知れません。

(文責：理学療法学科長 尾崎 勇)



## 障がい児と呼ばれる子どもたちの居場所

～実践から見える社会資源の現状と課題～

講師 太田 真氏

社会福祉学科では、NPO法人光の岬福祉研究会代表の太田真氏を講師に10月19日、特別講義を開催した。光の岬福祉研究会は発達に課題のあるお子さんのほか、心身に障がいのある方々の福祉ニーズを掘りさげ、その支援に努めるとともに、当事者とご家族がさらに地域社会に融合できるように協働し、ユニバーサルな社会基盤を築くことを目的に立ち上げられた法人である。今回の特別講義では障がい児と呼ばれる子ども達の居場所について、太田氏の法人で実施した調査結果をもとに、その実態を伺うことができた。調査結果から、弘前市内の障がいをもつ子ども達のほとんどの居場所が「自宅」であると報告され、さらに小学部から学年が上がるに連れ、「自宅」で過ごす割合は多くなる一方、過ごし方の満足度は低下していく傾向があり、居場所を確保する必要性が指摘された。だが、居場所を確保する上で地域の資源を活用しようとした時、障がいがあることを理由に「突き放されてしまうこと」がある一方、逆に障がいをもたない子どもには許されないことが、障がいをもっていることを理由に「許されてしまうこと」があり、こうしたことが資源を活用する上での悩みであるということも述べられた。まとめとして、資源を活用することに限らず、障がいを持つ方が何かを利用・活用する上で、自分でできるように努力することも大切だが、できないとき、困った時にどうすればよいかというスキルを障がいをもつ当事者や援助者、地域が兼ね備えることも大切であることが述べられた。尚、最後に太田氏が保護者の許可をいただき学生に紹介して下さった子ども達の写真の表情が大変印象的で、学生の心に響くものが多々あったのではないかと感じ入っている。(文責：社会福祉学科長 大和田 猛)



学生に質問する太田氏

## 研究談話会報告

健康科学研究センター長 松江 一

青森保健大学には、692名の学部学生と博士前後期の大学院生61名が在籍し、これを98名の教員と26名の事務系職員が研究、教育、学園生活等をバックアップしています。大学の大事な活動の一つに研究があり、本学では教員を中心に多忙な合間を縫って、医療、保健、福祉及びその他の各分野でそれぞれ興味ある研究に取り組んでいます。しかし、同じ大学に勤務していても、それぞれ講義、会議、学会及び地域活動でお互い多忙のため、各先生の研究内容をじっくり聴く時間が有りません。特に学科が異なると、月一回の教員会議、大学のパンフレットや大学案内でしか、お目にかかれない先生もおります。

そのため本学では開学以来、「研究談話会」を開催し、研究内容の相互理解や共同研究の推進、学内外の競争的研究費で行った研究の成果、さらに新任の先生には学内に新たな風を起こすような創造性あふれる研究を発表していただいております。平成18年度は以下の様な発表がなされました。

## 第1回研究談話会(センター特別研究報告)、

平成18年5月24日

演者；村松 仁先生(看護学科)

テーマ：「青森ヒバの香りのリラクゼーション効果に関する研究」

近年、精神安定と匂いの関係からアロマセラピーが注目されており、不安やストレス解消の効果が注目されている。演者は香りが看護分野でどのような応用ができるかを脳波との関係から基礎的研究を進め、今回、青森ヒバとグレープフルーツを使い脳波解析を行った事例を紹介した。このような研究事例が少ない看護分野での発展が期待されている。

演者；平尾明美先生(看護学科)

テーマ：「青森県下の救急病院における電話トリアージに関する研究」

病院などの救急医療施設では、患者、家族及び各機関からの電話による問い合わせや相談が多く、それをもとに次のステップへの適切な指示及び判断が行われている査を行い、その結果からどのよ

うなコミュニケーションの取り方が必要か、また電話トリアージに必要な看護能力とは何かについて講演した。またこの能力を養うには電話の対話だけのコミュニケーションと救急外来での臨床経験が重要であることを強調された。

**第2回研究談話会(新任教員)、平成18年6月28日(水)**

**演者；坂下智恵先生(社会福祉学科)**

**テーマ；「精神科デイケアにおける就労支援」**

精神科医療機関に通院中の患者の中でも、特にデイケアサービスを利用している慢性統合失調症者に対する就労支援が主たるテーマであった。演者は困難な課題ながら、就労支援プログラムの中に、金銭報酬を伴うプロセスを取り入れる方法が有用であることを説明された。さらに、患者の立場や、それを支援するスタッフの立場からの課題や、取り組み状況について具体的に言及された。加えて、早期介入の重要性とその後の段階を踏んだ働きかけが重要であることを強調された。

**第3回研究談話会(新任教員紹介)**

**平成18年7月26日(水)**

**演者；山田真司先生(人間総合科目)**

**テーマ；「情報幾何学の視点から」**

アカデミアはプラトンが開いた学校である。その入り口には「幾何学者にあらざる者、この門に入るを得ず」とあったという。幾何学は長い歴史を持ち、そこには多くの叡智が蓄えられてきた。それを生かすため、本来は幾何学に適さない対象も幾何学的に取り扱えるようにする工夫がデカルト以来なされてきた。しかし、確率については幾何学的に取り扱う方法を見出すことはできなかった。これを幾何学的に扱えるようにしたのが情報幾何である。この理論によって、確率に基づく多くの現象が幾何学的に記述できるようになった。演者はこの談話会で情報幾何の成り立ちと概要を説明し、その応用例としてテキストチャ画像の判別を紹介した。

**第4回研究談話会(センター特別研究報告)**

**平成18年11月8日(水)**

**演者；藤井博英先生(看護学科)**

**テーマ；「精神科訪問看護師が認識する精神科のアウトカムについて」**

入院治療の必要性がなくなったあとも、介護を

要する患者を自宅で面倒がみられないため入院したままになっている社会的入院が、医療費増大から大きな問題となっている。社会的入院とされる精神障害者7万人が、地域支援体制のもと地域で生活するようになる。その中で精神科の訪問看護の重要性がますます認識され始めている。演者は、精神障害者が再発しないため、精神科の訪問看護の効果について、どのような因子が良い結果をもたらすのか、そしてどのような訪問看護システムのモデルがいいのかを明らかにするため、全国の精神病院1348施設の実態調査を行った結果について講演した。演者は精神科における訪問看護の効果は、特に「精神状態の安定」、「生活技能の再獲得」、「生活の拡大」の三つ因子が互いに関わりあいがら「在宅生活の維持」をもたらしていることを明らかにした。

**演者；鈴木保巳先生(社会福祉学科)**

**テーマ；「障害者及び高齢者福祉領域における社会福祉士養成カリキュラムの課題に関する研究－要援助者のニーズ把握と多職種連携の側面からの検討－」**

障害児・者や高齢者福祉の現場ではどのような福祉専門職が求められているのか、生活支援を担う社会福祉士が大学や専門学校で、福祉専門職がどのように養成されているのかを実態調査した結果が報告された。演者は調査結果に基づき、支援を必要としている人の生活ニーズを的確にとらえつつ、医療等の他領域と連携しながら生活支援にあたることのできる人材の育成に必要な課題を明らかにした。

**第5回研究談話会(センター特別研究報告)**

**平成18年11月22日(水)**

**演者；中村由美子先生(看護学科)**

**テーマ；「子どもを育てている家族の家族機能の特徴」**

**演者；李相潤先生(理学療法学科)**

**テーマ；「青森県における身体組成の事態および中高年者健康教室における運動プログラムについて－自己ペースを最重要課題とした健康予防教室が身体及び心理的变化に及ぼす影響－」**

### 「高齢者フォーラム及びケアマネジメントフォーラム in 青森」について

社会福祉学科助教授 増山 道康  
健康科学教育センター主幹 高坂 修一

平成18年度社会福祉研修の「高齢者フォーラム」は、平成18年9月15日(金)に神奈川県立保健福祉大学教授太田貞司氏を講師に「高齢者ケアマネジメントと地域包括ケア～地域包括ケアの課題と仕組みづくり、その力～」と題して行われた。

太田教授からは、地域包括ケアシステムとは、地域の施設や在宅サービスなどの保健・医療・福祉、また住環境などの関係者が、障害・疾病のある人たちに対し、その人たちを主体にしながら、家族や地域住民の力を引き出しながら、できるだけ社会生活を維持できるように援助する地域システムであるとの説明がなされた。また、介護保険の目的ともされている「日常生活」について、一般的には「当たり前」という意味を持つが、「当たり前」とはどういうことなのかという提議がなされ、「住み慣れた地域で暮らす」「日常生活の支援」ということに関する、取り組み例が紹介された。最後に、地域包括ケアシステムを構築するうえで、「フォーマルサービス」と「インフォーマルサービス」また「施設」と「在宅ケア」のケアバランスを見ながら、「施設」の住宅化を図っていくことが重要であり、高齢者・家族介護者への支援のあり方、自治体の責任と役割を捉えることが課題であるとの指摘がなされた。

同日の午後に行われた「ケアマネジメントフォーラムIN青森」は、「ケアマネジメント実践力の応用と地域実践力の向上を求めて」という主題の元、午前中に行われた「高齢者フォーラム」と連携する形で行われた。基調講演は、ケアマネジメントとセーフティネットと題して首都大学東京教授岡部卓氏によって行われた。

その後、高齢者フォーラムで基調講演を行った神奈川県立福祉保健大学教授太田貞司氏と岡部卓氏をコメンテーターとして本学教員によるシンポジウムに移った。シンポジストは、川村佐和子研究科長、理学療法学科川口徹助教授、社会福祉学科大山博史教授の三名が勤め、社会福祉学科増山道康助教授の司会によって「包括ケアの展開を考えるー実践から保健・福祉・理学・看護の役割を探るー」と題して進められた。

基調講演では、生活困難を社会的周辺化として捉え、マイノリティ化による社会的排除から社会的統合を目指すための援助者の問題意識や、従来の防貧、救貧という二段階のセーフティネットに雇用や居住保障等を加え三段階のセーフティネット構築が重要だとの指摘がなされた。

各シンポジストからは、各々専門の立場から、青森県民が抱えている介護や高齢者の生活問題について指摘がされた。特に職種間連携や行政と社会資源との協働のネットワークの重要性は各シンポジストに共通した認識であった。

会場からも、新たな社会資源である地域包括支援センター職員や過疎を抱える自治体等から、現場の切実さを踏まえた質問が寄せられた。コメンテーターから最後に地域に即したケアマネジメント構築が急務だとの意見が出され、つつがなく終了した。



ケアマネジメントフォーラム

## 青森の保健医療福祉の実践力の向上 を期して

研修科長 渡邊 洋一

本学では、地域での保健・医療・福祉の連携を図るために各種研修の実施や、教員の教育活動の向上を目的として、健康科学教育センターの研修科が設置されています。その事業内容について紹介します。

当研修科では平成18年度には、教育改善事業と研修企画事業の二つの事業を柱として、教員の教育活動や研修企画を支援して研修事業として取り組みます。

また、第六回目を迎えた「ケアマネジメント IN 青森」では、格差社会など厳しい現状にあって、「セーフティネット」をテーマにして、県内の保健医療福祉の関係者と本学の教員・学生が参加して開催されました。また、知的財産保護について、関係者の専門研修会を開催して「特許をめぐる知的財産の課題や取り組み」について研修しました。

その他の研修科事業としては、保健医療福祉の啓発のためにブックレット「健康と生活シリーズ」の作成を予定しています。あわせて、現代GPの事業と協働して、下北地域での「こころの健康」の出前型研修会や講座の開催を予定しています。

なお、健康科学教育センターの研修科に関係した新事業として、「社会福祉研修事業」を本年度から取り組んでいます。内容は社会福祉主事養成や各種研修事業となっています。

このような研修科事業は、青森県内の保健医療福祉の関係者の連携と研鑽の場として企画され、本学の地域貢献事業として取り組まれています。人口減少社会にむけて、本県の実生活課題も多岐・複雑となっており、本学の取り組みの強化を図りたいと思います。ご協力をお願い申し上げます。



## 社会福祉研修事業

健康科学教育センター主幹 高坂 修一

社会福祉研修は、社会福祉法第21条及び第92条に基づき、福祉業務に従事する行政職員の訓練及び社会福祉施設等職員の資質の向上等を図るために、各都道府県・政令指定都市が実施しているものです。本県におきましては、昭和50年から青森県社会福祉研修所において、社会福祉研修業務を実施してきましたが、平成18年4月から青森県立保健大学において、社会福祉研修業務を行うことになりました。

社会福祉基礎構造改革以降、社会福祉事業について様々な改革が進められており、最近においても介護保険法改正や自立支援法の施行など、大きな変動期を迎えております。福祉現場においては、このような流れの中で、住民や利用者の方により良いサービスを提供するために一層の努力が求められております。社会福祉研修においても、福祉現場のニーズに応えられる研修機会を提供することによって、ひいては県民の福祉の向上に寄与できるものと考えております。

今後、社会福祉研修所で培った人材育成の精神を引き継ぎつつ、本学の理念である「ヒューマンケア」を目標に掲げるとともに、大学としての教育・研究機能を発揮し、「大学らしい」社会福祉研修事業を模索していく必要があります。

現在、社会福祉研修事業スタッフとして、石鍋健康科学教育センター長の下に、職員1名、社会福祉専任職員2名を配置し、平成18年度には、18項目の社会福祉研修を計画・実施しているところです。また、県が昭和26年から実施している社会福祉主事資格認定講習会(45日間)も併せて実施しております。

大学機関において社会福祉研修を行うというのは、これまで全国でも例がなく、初めての試みであるために注目度も高く、身の引き締まる思いですが、スタッフ一同、期待に応えられるよう頑張っていきたいと思っておりますので、皆様の御指導、御協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

## 平成18年度国際科活動紹介

国際科委員 山田 典子

本学国際科では、学生の皆さんがより高い専門性を身につけ、社会から信頼され、様々な分野で求められる人材として活躍できる基盤づくりのために、多様な機会の提供に取り組んできました。将来、幅広い分野で活躍するための総合力を養い、その向上を支える学術的研究や教育手法の開発を試み、今夏、千葉たか子助教授と筆者がインドのコルカタに現地調査に行っていました。マザーテレサの家でのボランティア実践や地域医療の現場視察は大変有意義なものでした(写真1)。

また、10月23日には、モンゴルで沙漠化防治活動を展開しておられる長濱直氏、長濱晴子氏をお招きし、国際科市民公開講演を開催し好評を得ました(写真2)。

この他に、国連大学グローバルセミナー・東北セッションへの企画委員としての参加、クオレ七戸との連携、さらには12月8日に学生の海外研修発表会の開催等ございます。多くの方のご参加をお待ちしております。



写真1、インドコルカタの病院：現地看護師による「母子外来の障害児への指導」



写真2、長濱講演会：学生達と一緒に内モンゴルの文化や状況を共有

## 公開講座実施報告

地域貢献委員会

本学では平成11年度の開学以来、毎年公開講座を開催しています。平成18年度は「生活と健康」をテーマに、本学講堂で4回、第5回はむつ市の下北文化会館で開催し、延べ972名の方が受講しました。

### 《第1回 6月3日(土曜日)》

- ① ころころは脳のどこにあるのか  
講師：尾崎 勇(理学療法学科教授)
- ② パートナー間の暴力問題を考える  
—DVの現状と安全・安心への取り組み—  
講師：山田 典子(看護学科講師)

### 《第2回 6月17日(土曜日)》

- ① 難病とともに生きる人々を支える看護  
講師：川村 佐和子(看護学科教授)
- ② 私は日本人(のはず)です  
—国籍法に関する判例を少々—  
講師：大竹 昭裕(社会福祉学科助教授)

### 《第3回 7月1日(土曜日)》

- ① 隣近所の見守り活動と寄付文化  
—マザーテレサのセツルメント実践から学ぶ—  
講師：渡邊 洋一(社会福祉学科教授)
- ② 子どもの入院生活と環境を考える  
講師：吉川 由希子(看護学科講師)

### 《第4回 7月15日(土曜日)》

- ① 眠る技術  
—良い眠りで日中は元気に—  
講師：角濱 春美(看護学科助教授)
- ② 家庭でできる理学療法  
—広報誌「PTあ！」をご存知ですか?—  
講師：桜木 康広(理学療法学科講師)

### 《第5回 7月29日(土曜日)》

- ① イカ墨の不思議  
—先端科学を地域食資源に—  
講師：松江 一(人間総合科学科目教授)
- ② Culture, Community and Communication  
文化、地域社会、コミュニケーション  
講師：Alan Knowles(人間総合科学科目教授)



第3回公開講座

より良き学生生活のために ―後援会懇談会を通して―

学生委員会

昨年に引き続き「後援会(保護者)懇談会」が、大学祭初日の10月7日(土)に開催されました。後援会の皆様と大学との接点は、入学式時の後援会総会、年1回発行される「後援会だより」、本学の広報パンフレット「活彩! 保健大学だより」等を通じて、本学の現況や最新情報、年間の様々な行事・企画等を紹介するという本学からのお知らせのみでした。そこで、本学教員の声により、本学の教育方針や教育体制、各学科での指導状況、課外活動、そして学生生活や就職支援体制をご理解いただくと機会として、昨年より実施しました。後援会の皆様と膝を交えて親しく懇談することで、本学に対して率直な意見・要望をいただき、お子様に対する教育・生活支援の充実をより一層図ることができると確信しての実施です。

当日は生憎の空模様でしたが80名ほどのご出席を頂き、第一部:全体説明、第二部:学科別説明、第三部:個人面談を行い、学業、就職、大学生活全般についての具体的な内容やサポート体制について各学科より説明があり、担当教員と熱心に相談や情報交換がなされました。また、当日の意見交換や懇談会への出欠席ハガキのアンケートでは多数の要望や提言、また感謝やお礼の言葉もお寄せいただきました。これらの意見・要望につきましては、大学全体として直ちに对应できるもの、中長期的に対応していかなければならないものとして検討・改善していきたいと思えます。なお、現時点で回答・説明できる内容につきましては各学科や部局より回答をいただき、本号発送と同時に送りたいと考えております。



学生部長からの説明(全体説明)

貸出ランキングNo.1は?

図書館主査 小野 由美

最近、学生のみなさんは本を借りるときほとんどカウンターの前にある自動貸出装置を利用されているので、図書館職員が貸出手続きすることが少なくなりました。そのため本が返却されたときに、「ああ、こんな本が借りられているんだなあ」とカウンターで漠然と受取っておりました。では、いちばん借りられている本は何だろうと思い、2006年上半期(4月-10月)の貸出ランキングを集計してみました。第1位は「看護過程に沿った対症看護」で、貸出回数32回とダントツでした。看護学分野の本がベスト10の8冊を占め、学生数が多いことも起因しておりますが、看護学科の学生が本当によく本を利用していることが分かります。

図書館サービスの評価指標の1つに、学生1人あたりの年間貸出冊数があります。ここ数年の全国の大学図書館での平均は1人約8冊ですが、本学は2004年度、2005年度ともに36.3冊という多さです。図書館は利用されてこそ価値があります。利用者の期待に応えるべく、図書館では毎月専門分野の新刊書を購入し、1階ではテーマを設けて企画展示もしています。また、図書館で所蔵していない本はWEB上から購入希望図書として申し込むこともできます。本は貸出冊数無制限という破格の条件で貸出を行っております(貸出期間は2週間)。学習に、研究に、読書に大学図書館を大いに活用してください。図書館職員一同カウンターにて笑顔でお待ちしております。

貸出ランキング(2006年4月~10月)

第1位 看護過程に沿った対症看護	32回	第6位 看護診断に基づく標準看護計画5. 外科2	16回
第2位 New 疾患別看護過程の展開	23回	第7位 全科ドレーン管理マニュアル	15回
第3位 標準看護計画 第1巻	21回	第7位 図解理学療法技術ガイド	15回
第4位 保健師国家試験のためのスキルアップ・ブック	19回	第7位 看護診断対応症状別看護計画	15回
第5位 看護診断と病態の関連図 上	17回	第7位 カルペニート看護診断マニュアル	15回

【**本学見学・出張講義に関する活動報告**】

学生募集対策委員会

＜**キャンパス見学実績 (H18.11.15現在)**＞

本学では、オープンキャンパスや夏のキャンパス見学会の他に、高校生の皆さんをはじめ、多くの方々にキャンパス見学の機会を提供しています。快適な教育環境、入門的な模擬講義、充実した教員数や設備はとても好評で、本年度はこれまで、以下の皆様にお出で頂いています。

【高校生】青森北高校(84名)、木造高校(2回、85名)、百石高校(37名)、大湊高校(25名)、尾上総合高校(24名)、七戸高校(40名)、三戸高校(11名)、青森戸山高校(70名)、青森中央高校(33名)、田名部高校(68名)、盛岡南高校(204名)、弘前南高校(18名)、黒石高校(37名)、十和田西高校(41名)、六戸高校(105名)

【高校生保護者】十和田西高校(22名)

【小中学校】藤崎中学校(4名)、横内中学校(6名)、浜館小学校(15名)、佃中学校(4名)、三沢市立第三中学校(37名)

＜**出張講義実績 (H18.11.15現在)**＞

本学では、高校へのお出張講義にも積極的に取り組んでいます。本学教員による講義はとても興味深く分かりやすいと、受講された高校生から感想を頂いています。今年度の特徴として他県の高校からも依頼があり、本学が確実に全国区の大学である事が伺われます。出張講義高校名は以下のとおりです。

本県：三沢高校(25名)、八戸南高校(44名)、弘前中央高校(22名)、八戸東高校(23名)、八戸北高校(26名)、弘前南高校(30名)

他県：宮城県古川高校(40名)、秋田県立本庄高校(74名)、岩手県立釜石南高校(44名)

本学では学生募集対策委員会を中心に、より多くの高校生に本学の魅力を感じていただけるよう、積極的に大学見学や出張講義に対応し、2007年「全入学時代」を迎える中、一人でも多くの高校生に本学を志願していただきたいと考えています。



説明を熱心に聞く六戸高校1年生のみなさん

**【学部：一般選抜】平成19年度入学者選抜試験のお知らせ**

青森県立保健大学では、一般選抜試験の平成19年度入学者を募集しています。詳しくは、一般選抜の「募集要項」をご覧ください。

連絡先/教務学生課入試担当 TEL017-765-2144 FAX017-765-2188 E-mail nyushi@auhw.ac.jp

●**一般選抜：前期日程**

募集人員	看護学科……………47名	出願期間	平成19年1月29日(月)～平成19年2月6日(火)
	理学療法学科……………12名	選抜試験	平成19年2月25日(日)
	社会福祉学科……………18名	合格発表	平成19年3月8日(木)

●**一般選抜：後期日程**

募集人員	看護学科……………8名	出願期間	平成19年1月29日(月)～平成19年2月6日(火)
	理学療法学科……………募集なし	選抜試験	平成19年3月12日(月)
	社会福祉学科……………6名	合格発表	平成19年3月22日(木)

# 人事異動のお知らせ

## <新任紹介>

(H18.12.1付)



理学療法学科 助手

長門 五城

(ナガト イツキ)

北海道から参りました。青森で生活することも教育・研究機関に勤務する機会も初めてですが、すべてを楽しみながら過ごしていきたいと思っております。どうぞ宜しくお願い致します。

## [大学院博士前期課程(二次募集)] 平成19年度入学者選抜試験のお知らせ

青森県立保健大学では、大学院博士前期課程(二次募集)の平成19年度入学者を募集しています。詳しくは、大学院の「募集要項」をご覧ください。

連絡先/教務学生課入試担当 TEL017-765-2144 FAX017-765-2188 E-mail nyushi@auhw.ac.jp

### ●大学院(健康科学研究科博士前期課程二次募集)

募集人員	健康科学専攻…………… 9名	出願期間	平成19年1月22日(月)~平成19年1月26日(金)
	地域保健福祉学分野、理学療法学分野	選抜試験	平成19年2月10日(土)
	生活健康科学分野、看護学分野	合格発表	平成19年2月16日(金)

## 編集後記

《活彩!保健大学だより》第15号をお届けいたします。暗いニュースが続く昨今ですが、いかがお過ごしでしょうか。厳しい冬に向かう季節ではありますが、本学ではさまざまな取り組みが行われています。

本学の行事や教育活動・研究活動などをお伝えすることが目的の本誌も、はや15号となりました。本号では、現代GP、大学祭、高大連携、国際交流、海外授業、実習関係、修士論文中間発表会、特別講義などさまざまな行事や活動を紹介することができました。原稿執筆にご協力くださった皆さま、ありがとうございました。

なお、本号では、しばらく休載しておりました教員の研究活動の紹介の一環として、研究センターの研究談話会の報告を掲載いたしました。本学教員の研究活動の多様さを知っていただくきっかけになればと思います。教員の研究内容にご興味をお持ちの

方は、当委員会が編集発行を担当しております『大学年報』(毎年発行しています)や本学ホームページ上の教員紹介データベースなどをぜひご覧ください。

本学は、開学8年目を迎え、さまざまな取り組みを展開しており、広報のあり方も問われています。広報のあり方や広報誌に関するご希望・ご意見などありましたら、ぜひお寄せいただきますようお願いいたします。(広報記録委員 廣森直子)

### ◎ 広報記録委員会委員

大和田猛、竹森幸一、鳴井ひろみ、山下弘二、加賀谷真紀、廣森直子、森永八江、坂本芳人、笹常春

### ◎ 広報記録委員会事務局担当

赤坂太郎、藤田真理子、蛭沢幸子



青森県立保健大学

〒030-8505 青森市浜館字間瀬58-1 TEL017-765-2000(代表)

編集・発行/青森県立保健大学広報記録委員会

大学ホームページ <http://www.auhw.ac.jp/>  
(バックナンバーもご覧になれます。)